

# 生活における労働と造形行為

## ウィリアム・モリスとジョン・ラスキンの生活デザイン考

“Labor and Art” in the Life

William Morris's and John Ruskin's Thinks about Art and Design of Life (Seikatu Design)

久保村里正

Risei KUBOMURA

### Abstract

The art and design of life (Seikatu Design) is the area which handles an art activity in the life.

On the other hand, The Lesser Arts on Morris to say is the art which makes one beautiful familiar living space daily and is approximately the same meaning.

Therefore, in the paper, when studying art and design of life (Seikatu Design) about today, it thought of the concept, The Lesser Arts which is important in the thought on Morris, from the social background in the times, the Industrial Revolution.

Then, as for the art and design of life (Seikatu Design), it considered from the history.

Keywords : William Morris , John Ruskin , Lesser Arts , the Industrial Revolution

### はじめに

ウィリアム・モリス (William Morris, 1834-1896) にとっての最初の公開講演である「装飾芸術」<sup>i)</sup> "The Decorative Arts: Their Relation to Modern Life And Progress" は、1877 年にロンドン・オックスフォード街の協同組合ホールで行われた。この公開講演でモリスは「小芸術」 "Lesser Arts" という概念について、"those lesser, so-called Decorative Arts"<sup>ii)</sup> と述べており、その後、"Hopes and Fears for Art" の中で、「小芸術」 "The Lesser Arts" として、編集している。

モリスは、この他にも「小芸術」について、「民衆の芸術」<sup>iii)</sup> "The Art of The People"<sup>iv)</sup> (1879 年)、「生活の美」 "The Beauty of Life"<sup>v)</sup> (1880 年)、「芸術と大地の美」<sup>vi)</sup> (1881 年)、「生活の小芸術」 "The Lesser Arts of Life (Some of the Minor Arts of Life)"<sup>vii)</sup> (1882 年) など、数多くの講演にも度々言及しており、彼の芸術家、思想家としての象徴的な言葉となっている。<sup>viii)</sup>

この小芸術という言葉はモリスによる造語であるが、小野二郎はモリスの講演「小芸術」(1877 年)の中から、モリスの小芸術について次のように定義している。

モリスがレッサーアーツというのは、いわゆる装飾芸術、彫刻や絵画といった大芸術に対してそう呼ぶもので、「日常生活の身のまわりのものを美しくする」芸術の総体をいう。家屋建築、塗装、建具、大工、鍛冶、製陶、ガラス製造、織物などを網羅する一大産業である。<sup>ix)</sup>

この様な小野の述べている大芸術 (Great Arts) と小芸術

(Lesser Arts) を捉える概観を端的に示すのならば、純粋芸術 (Fine Arts) に対する応用芸術 (Applied Arts) の関係に対比して捉える事が出来る。そして、ウィリアム・モリスが近代デザインの父と呼ばれ、その創始者とされている事を鑑みるのならば、モリスの思想の要諦<sup>1)</sup>となる小芸術を、デザインの出自となる応用芸術と重ね見ることは可能である。しかし、この小芸術という言葉はモリスの様々な主張の要諦であるが故に、彼の思想家としての思考を色濃く反映しており、単に芸術の一領域を指し示しているという一面をとらえるだけでは十分ではないだろう。つまりそこには、産業革命による社会生活の大きな変容が旧来の社会・文化に及ぼした影響と、それによる新たな文化の創出を読みとることが可能である。

そして現在、パーソナルコンピュータを中心とした情報機器の普及によって、情報革命<sup>x)</sup>・デジタル産業革命<sup>xi)</sup>などと呼ばれるような産業革命以来の大きな社会変革を引き起こされ、その様な社会変革の中、モリス以降、現在まで続いてきた近代デザインのパラダイムも変わろうとしている。また、人々の生活の質が向上することによって、多くのデザインされた物やデザイン行為が、日常生活の中に溢れ、生活美術・生活造形・生活デザイン<sup>xii)</sup>と呼ばれるような言葉も耳にするようになってきている。

この生活デザインという概念は、その言葉の通り生活の中の芸術活動を扱う領域であり、モリスの「小芸術」も、「日常生活の身のまわりのものを美しくする」芸術であり、時代を隔て成

立した同意の概念ではないかと思われる。そこで小論は現代における「生活デザイン」を考える上で、モリスの思想の要諦である「小芸術」という概念を、産業革命というその時代の社会背景から整理し、生活に関わる造形デザイン分野について、生活における労働と造形行為に着目し、その歴史から考察を行いたい。

## I モリスの生きた時代とその社会背景

産業革命以前には工業製品は存在しておらず、すべての製品（生活ツール）が、家内制手工業による手工芸品であった。そして産業革命以前の生産手段が家庭内手工業中心であったことを鑑みるのならば、歴史的には産業革命以前の生活ツールは全て手工芸（Hand Craft）だということになる。しかし18世紀末にイギリスで発生した産業革命は、蒸気機関の発明によって新しい機械器具と生産技術の急速な発達を促し、大量生産による大量消費の社会を生み出した。そしてその結果、身の回りの多くの手工芸による生活ツールが安価な工業製品へと代わり、この様な産業革命による生活の変化を受け、モリスは美術工芸運動（Arts and Crafts movement）を引き起こしたのである。そこで本章ではモリスの思想について、美術工芸運動の遠因ともなった産業革命と当時の社会の変容から考察を行いたい。

### 1 産業革命による社会の変容

近代デザインを成立させる背景となった、イギリスの産業革命「the Industrial Revolution」とは、どのような社会現象であったのであろうか。そのことについて染谷孝太郎は『産業革命序説』で、以下のように産業革命を規定している。

一七六〇年代から一八三〇年代にいたるほぼ六〇年間にわたる工業の技術的過程に端を発する社会経済的変革であり、各国の産業革命中最も先進的で典型的な産業革命であり、まぎれもなく世界的にみて重要な意義を持っている〈略〉一七六〇年代から一八三〇年頃にいたる一連の技術的過程における変革を起点として工場制工業を出現せしめ、手工業とマニュファクチュアを工場制工業の従属物に転化し、工場制工業を生産における主人公たらしめ、資本対賃労働の生産関係を定置して近代資本主義を確立し、政治的構造においてもその性格を明確にブルジョア的なものたらしめる重要な契機となった歴史的・社会的事件こそ産業革命の名に値する変革であった。〈略〉領主のかわりにブルジョアジーが、農奴のかわりにプロレタリアートが二大階級としてあらわれ、それらが階級的に対立する社会をもたらした。

xiv)

このように産業革命とは、単なる蒸気機関による生産システムの変容だけではなく、それによって引き起こされた社会システム全体の、革命的な大きな変容のことを指している。当時の

社会は産業革命によって、大きな社会変革の渦中にあった。産業革命が経済活動だけではなく、文化や社会制度までも巻き込んだ一大変革であったことは言うまでもないだろう。しかし、産業革命によって引き起こされた社会の変容は、全てが一般通念上好ましいと考えられるような現象だけではなく、琴野孝が以下に述べているように、社会的に不幸な現象も少なくなかった。

産業革命が国民生活、殊にその多数を占める労働者・農民の生活にいかなる変化をもたらしたか。それは大衆にとって生活の向上と繁栄への展望をきりひらいた歓迎さるべき変革であったか、それとも、国民経済の飛躍的發展の陰で大衆生活の物質的窮乏化と精神的不満の増大が必然的に随伴し、その意味からすれば正に不幸な変革であったのか、という問題は十九世紀以来様々な領域の専門家によっていろいろな視角から観察され、分析されて、相反する二つの見解が主張されてきた。<sup>xv)</sup>

しかし実際のところ、産業革命は「歓迎さるべき変革」「不幸な変革」のどちらかに規定されるようなものではなく、その両方の側面を持っていた事には違いない。だが産業革命の1つの面は、社会的弱者を更に苦しめることとなった。例えば、産業革命の負の面の典型的な例として、当時の労働者、特に子供の労働の状況を、イギリスの経済学者 T.S. アシュトン（Thomas Southcliffe Ashton, 1889-1968）は、以下のように述べている。

工場「徒弟」apprentices の物語は気のめいるような種類のものである。その多くがやっと七歳に過ぎないような子供たちが、一日に十二時間も十五時間も、一週間六日にわたって働かねばならなかった。ハモンド夫妻が言ったように、「彼らの幼い生命は、良くて単調な労働に、ひどい時は人間惨苦の地獄の中で、使い果たされていた」。<sup>xvi)</sup>

しかし、これらの過酷な労働状況は全ての工場で見られた訳ではなかった。アシュトンによると、アークライト、グレッグ、サミュエル・オールドノウ、ロバート・オウエンなどの資本家は真面目に雇用者としての責任を果たしていたと述べている。またポール・マントゥ（Paul Mantoux, 1877-1956）はこの様な過酷な子供の労働環境について、次のように述べている。

児童の強制労働がけっして新しく生じた不幸ではなかったということである。家内作業場においても、児童の搾取がまったく当然のこととして慣行になっていた。<sup>xvii)</sup>

つまり子供の労働に関しては産業革命とは関係なく、それ以前にも日常的に行われた事を示している。またアシュトンは、産業革命の二面性について、当時の社会状況とそれ以前の社会状況を比較して、次のように述べている。

技術的・経済的変革そのものが惨禍の源泉であったということの意味するならば、この意見はたしかに不当であるだ

## 生活における労働と造形行為

ろう。この時代の中心問題は、それ以前の時代よりも遙かに多くなった幾世代かの児童を、いかにして食べさせ、着せ、雇傭するかということであった。アイルランドもそれと同じ問題に直面していた。そしてこの問題を解きえなかったアイルランドは、四〇年代にその国民の五分之一を移民と飢餓と疾病とで失った。<sup>xviii)</sup>

つまりアシュトンが産業革命が起こったのは当時の社会問題を克服するための歴史の必然であり、それによって起こった弊害より、産業革命が無かった場合の状況を想定している。確かにイギリスの搾取されていた労働者階級でさえ、産業革命が遅れた地域よりは生きていく上では、いささか幸福であったともいえる。この様な産業革命に対するとらえ方は、産業革命が当時の社会全体に及ぼした影響と、その後の展開を考えてみると賛同できる点が多く、現在の産業革命に対する一般的な見方となっている。

### 2 産業革命に対するモリスの見解

しかしモリスは以下のように、産業革命によって得られた労働者のわずかなメリットである些かの生活の向上に対しても、否定な見解を示している。

現実はどうだろう。大部分の文明人が貧しいということを誰があえて否定するだろうか。かれらはあまりに貧しいので、かれらはある点では先祖よりも少しは暮らし向きがよくなっているかどうかをわざわざ討論するのは、まったく稚気の沙汰といわざるを得ない。かれらは貧しいし、またかれらの貧しさは方策のない未開人の貧しさによって計ることはできない。<sup>xix)</sup>

この様にモリスは産業革命とそれによって生じた社会の変革に対して、一貫して否定的である。このモリスの思想の形成には、モリス自身が「このラスキンが、私が実践的社會主義にはいる以前に、この理想に私を指導してくれた先生だった。」<sup>xx)</sup>と述べているように、ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) の果たした役割は少なくないだろう。

ラスキンは産業革命について、『ヴェニス石』<sup>xxi)</sup>で、産業革命によって発明された労働分業は労働を分割したのではなく、人間が断片化されたのだと述べた。それは単に産業革命によって単に労働の完結性が失われたことを述べているのではなく、労働者が人間性を失うと共に、労働の中の創造性が失われていることを示している。そしてモリスも又、「有用な仕事と無用な労役」で、当時の労働について、以下のように述べている。

こんな風に、価値ある仕事には、休息にある楽しみの希望と、その仕事がつくるものをわれわれが使用するのを楽しむ希望と、われわれの日常の創造的技術を楽しむ希望が伴うのである。これ以外の他の全ての仕事は価値がない。それは奴隷の仕事――すなわち、生きがいのための、単なる労

役、それも生きて骨折るために、生きる苦役である。<sup>xxii)</sup>

ここでモリスは人間の労働を2種類に分けて述べている。一つは善なる喜びに満ちた自発的な有用な仕事 (opera) であり、もう一つは悪しき苦しみに満ちた強制的な無用な労役 (labor) である。そしてモリスはこの2つの違いの原因を、創造性・芸術性の有無に求め、仕事が労働になってしまった原因を、産業革命によって生み出された資本家と労働者の関係と、機械による大量生産システムに帰着させている。

### 3 社会主義者としてのモリス

この様なモリスの産業革命に関する否定的な考え方は、当時の社会思想として大きな潮流の一部をなした。この資本家と労働者の関係に対して否定的な思想は、社会主義と呼ばれ、この思想についてトインビーは、以下のように述べ、資本主義と対立的に扱っている。

産業革命は新興のブルジョアジー・資本家を生みだし、資本主義の形成に大きく寄与するとともに、そのアンチテーゼとして社会主義を生み出した<sup>xxiii)</sup>

しかし、そう考えるのなら社会主義は、資本家と資本主義のアンチテーゼであったとしても、生産手段の革命的な変革としての産業革命のアンチテーゼではないのではないと思われる。少なくとも産業革命は、当時の社会問題を克服するための歴史の必然であり、その生み出した富によって、人々の生活を向上させ、貧困層にある多くの人々の生命を救った事には違いない。そして産業革命が生み出した資本主義とそのアンチテーゼとしての社会主義、この対立する2つの思想が、その功罪をもってモリスの思想の根幹に関わってきている。

モリスが1883年のオックスフォード大学での講演「芸術と民主主義」で、初めて自らが社会主義者であると明かしていることから、モリスが社会主義者であったことは歴史的な事実である。<sup>xxiv)</sup>故にモリスは資本主義がもたらす些かの効用に目をつむり、資本主義及び、その契機となった産業革命に対して反対の立場をとったのである。しかし、資本主義下において作り出された商品が、資本主義の競争による品質の向上と価格の低下を引き起こし、人々はより安価でより良い商品を手に入れることが可能となった様に、資本主義の競争によって経済的な大きな進歩がもたらされたことは否定出来ない。トインビーが次に述べているように、社会にとって生産 (サービス) の競争は、非常に有益だと言える。

疑いなく、競争はその効用を持っている。競争なしでは進歩は不可能であろう。けだし、進歩は主として外部から来るものであるからである。人をして努力せしめるものは、外部からの圧力である。しかるに、社会主義者たちは、この利益は、人間の生命と労働との莫大な消費、しかも統制によって避けられる浪費を代償としてえられるのだと主張

している。がしかし、ここでわれわれは生産における競争と分配における競争とを区別しなければならない。この区別は近代的立法の中で認められているのであって、それは一面においては契約の範囲を拡大し、他面においてはそれを縮小した。けだし、生産においてお互いに勝とうとする人々の争いは社会にとって有益である。しかしその共同生産物の分配のための争いはそうでない。<sup>xxv)</sup>

しかし、モリスはこの様な生産のための競争を「奢侈といわれるものの奴隷」や「流行という不思議な怪物」<sup>xxvi)</sup>を生み出すものだとして否定し、「誠実と簡素な生活」<sup>xxvii)</sup>という2つの徳によって「疫病のようながらくた」<sup>xxviii)</sup>ではなく、「作る価値ある品物」だけをつくる社会の必要性を述べている。

すべて作られるものは作る価値あるものでなければならぬといふ私のいったとき、私は主に労働のためにこの要求を提出したのである。無用のものを作る消費は労働者に二重の嘆きをあたえるからだ。民衆の一員として労働者は無理にもその品物を買わなければならない。その惨めな賃金の大部分が広い意味での現物給与制度の型で絞りとられてしまうわけだ。それに生産者の一人として労働者は無理にこんな品物を製造しなければならず、日々の労働の快楽という根底を奪われる結果となる。<sup>xxix)</sup>

産業革命によって多くの人々が生命の危機的状況から脱し得たのは、産業革命の功である。これはモリス自身、その恩恵を受けており、認めざるを得ないことであろう。しかし、資本主義による許容以上の生活格差の発生や、過度の競争による不必要な生産などは負の側面であり、モリスが反論するところである。そして、その問題の解決はモリスが述べているように「誠実と簡素な生活」という2つの徳によってなされるべきものである。

モリスが小芸術を唱えた要因には、時代背景として産業革命による大きな社会変革があり、その急激な変革による社会の歪みがあった。その様な人間疎外を生み出す社会状況の中で、当初モリスはラスキンの影響から復古的に中世へ理想を求め、後に社会主義へ求めたのである。モリスの思想が中世の伝統的な慣習から社会主義へと変わったのは社会科学的な理論に裏付けされたようなものではなく、モリスが社会主義の思想を「それは初めから私のもっていた見解なのだ。」<sup>xxx)</sup>と述べているように、資本主義の負の側面に対するアンチテーゼとしてモリスの思想と社会主義思想が感応したことによる感覚的な迎合であったと思われる。それ故にモリスの考える社会主義思想は、極めてモリス的であったといえよう。

## II 生活に関わる造形デザイン分野

モリスの社会主義思想は極めてモリス的であったと先に述べたが、モリス的社会主義とはどのようなものであろう。それを換

言するのならば、芸術の視座にたった社会主義と言えるかもしれない。そして、それとは逆にモリスの芸術に対する考え方は、色濃く当時の社会主義思想の影響を受けており、思想家モリスの中で、芸術家と社会主義者という2つのモリスの顔が相互に影響を与え融合している。そこで本章では思想家モリスの2つの顔から、モリスの思想の要諦となった小芸術を考察し、生活に関わる造形デザイン分野について明らかにしたい。

### 1 小芸術と大芸術

モリスは彼の制作フィールドである工芸・版画などを小芸術と呼び、絵画・彫刻などの大芸術とは別の認識をしている。そしてモリスは彼の講演「生活の小芸術」で述べているように、小芸術と大芸術が分かれた状況を危機的だと考えていた。

中世以降、絵画や彫刻のみが大芸術となり、その他は小芸術あるいはクラフトとして取り残された状態となった訳であるが、それは芸術全体にとっての危機であり、大芸術と小芸術は助け合わねばならない。<sup>xxxi)</sup>

またモリスによると、中世は小芸術と大芸術は融合していたが、産業革命とその後の資本主義の台頭により、芸術は分離し、小芸術は資本主義が生み出した安価な商品に追いやられ、大芸術は富裕層の慰みとなり、その精神を失ったとしている。そこでモリスは小芸術と大芸術が助け合うことによって、真の芸術「民衆の芸術」が創出できると考えたのである。

このモリスの企図した「民衆の芸術」は、以下で述べている「ユートピアだより」の中のユートピア（理想社会）に描かれているが、その物語の中では大芸術（美術品）という領域は労働によって消失している。

一口にいって、かつては美術品と呼ばれていたような物の生産だったのですが、それはもやはわれわれのあいだでは特別の名称と呼ばれたれははなくなりました。というのは、それは物を造り出すすべての人間の労働の必要欠くべからざる一要素となってしまったからです。<sup>xxxii)</sup>

つまり非労働者である富裕層の為に存在していた大芸術は、労働によって特別なものではなく、生活の中の芸術である小芸術と融合し「民衆の芸術」になったということである。

### 2 民衆の生活

それでは「民衆の芸術」に出てくる民衆とは、どのような人々であろうか。小野はモリスの民衆観について、「第一に、彼らは生産者である。いつの時代でも直接生産者である。第二に、彼らは被支配者階級である。」<sup>xxxiii)</sup>と述べている。このようなモリスの民衆に対する考え方は、産業革命のアンチテーゼとして発生した社会主義の影響、つまり資本家と労働者、雇用者と勤労者といった関係を強く意識したものであり、モリスにとっての民衆は労働者そのものであった。

## 生活における労働と造形行為

しかし、このような考え方は資本主義下における狭義の民衆であり、広義の場合、モリスは理想社会の人々すべてが民衆であると定義し、資本家と労働者の区別無く、全員が働くと考えた。又、現実では以下でマントゥが述べているように、産業革命の初期においては資本家と労働者といった対立した関係は存在していなく、全てが労働者であり民衆であった。

「マニファクチャラ」manufacturer ということばは、労働者ouvrierにも工場主fabricantにも差別なく用いられていたが、どちらかといえば、後者よりも前者の意味に近いことが多かった。一七二〇年ごろに、マンチェスターの「ある著名な工場主」は、朝の六時に仕事場へ出むき、徒弟たちといっしょに小麦粉を牛乳で煮込んだ朝がゆをすすり、かれらと一緒に仕事にとりかかった。〈中略〉その独立性という点では工場主であり、その職業や生活様式という点では労働者であるという、二面的な性格をもっていた。<sup>xxxiv)</sup>

そして時代を経ると、このような関係は産業革命の広がりと共に減少<sup>xxxv)</sup>していったものの、資本家となる富裕者層が未発達な地方においては、なお続いていた。またモリス自身が管理者と職工長を兼ねた「親方」としてひっぱりつづけていった中世風の工房だったモリスの商会も、このような性質を持っており、そういう意味ではモリスは中産階級に属していたものの、職業や生活様式という点においては紛れもなく民衆であった。<sup>xxxvi)</sup>

### 3 生活における労働と休息

この様にモリスは理想社会の住人を民衆と呼んだが、モリスにとって民衆の生活は、労働と休息という2つの行為で占められており、この両方の行為と、生活の場としての住宅が保証されることが、生活上、重要なことだと考えていた。その事についてモリスは「芸術と社会主義」で、以下のように述べている。

適当な秩序ある社会では労働する意志のあるすべての人々には次のことが確保されねばならぬ。第一。恥ずかしくない適切な仕事。第二。健康にして美しい住宅。第三。心身の休息のための十分な余暇。<sup>xxxvii)</sup>

またモリスは以下で述べるように、芸術が存在するためには安定した生活基盤が必要であり、生活を道理的に送る為には芸術が必要であると考えていた。

芸術とは何たるか、あるいは芸術の根が、いかに繁栄した不安のない生活の土壌を必要としているか、わからないのである。〈中略〉労働者の前に、充実した、道理にあった生活の理想を置くということは芸術の領域である。それは美と知覚の創造、ならびに存在する真の快楽の享受が、日々の糧と同じように人間にとって必要なものである。と感じられるような生活である。<sup>xxxviii)</sup>

そう考えると健全な民衆の生活のためには芸術が必要であり、その芸術が存在するためには安定した生活基盤が必要だとい

ことになる。それでは生活基盤を安定するためには何が必要なのか。それは前述した住居と仕事と余暇だと考えることが出来る。

#### 1) 仕事に内在する芸術

それではモリスが民衆の生活上必要だと考えていた仕事とは、どのようなものであろう。先に労働を有用な仕事と無用に労役に分けたが、モリスは理想社会における仕事について、「ユートピアだより」で、以下のように述べている。

今ではもう一切の仕事が楽しいものとなっていますが、それは、仕事をしている際、それによって名誉や富において得ることがあるだろうという期待が持てるからです。そしてそういう期待が、たとえ仕事そのものが楽しくない場合にも楽しい興奮を惹き起こすからです。それともまた、機械的な仕事といわれるものの場合と同じく、仕事がただ楽しい習性となってしまったからです。また最後には（われわれの仕事の大部分がこの種類に属していますが）、仕事そのものの中に自覚された感覚的な喜びがあるからです。つまり芸術家としての仕事をしているのですね。<sup>xxxix)</sup>

ここでモリスが述べている仕事とは、芸術的な要素、芸術性・創造性が内在しているものである。そして、その芸術性を内在する仕事は、楽しく喜びがあると考えられている。そういう意味では、芸術には民衆の生活における労働に、精神的・肉体的な希望と快楽を与え、余暇を豊かにする働きがあり、芸術が人々を幸福にするものだと言える。<sup>xl)</sup>つまり、モリスにとって真の芸術とは、民衆の生活やその中での労働（仕事）に帰される問題であって、より良き労働は芸術性をもった仕事だということになる。

そう考えるとモリスにとって芸術と民衆の労働（仕事）は相互に切り離せないものだといえる。そしてモリスは芸術を、より広い概念として拡大してとらえ、本来の意味の芸術的創作活動の仕事以外にも、多くの仕事に芸術性・創造性が存在していると定義<sup>xli)</sup>し、理論の一般化を試みた。又、一部の例外的な芸術に否定的な人々については、下記のように「芸術的でもいってよいような方法」で仕事を行っていると述べ、仕事への芸術性の内在化を示した。

そういう人々のほかに、心も高潔で、思索に耽り、教養もある人々で、芸術は文明の馬鹿らしい偶発物にすぎない、いや、もっと悪いことには、人間の進歩の邪魔もの、病気のようなもの、これを阻害するものだと心ひそかに考えている人々が多くいる。確かにこういう人々のあるものは他の方面の思索に大変忙しい。こういう人たちは芸術的でもいってよいような方法で科学、政治、その他のことに夢中になっているので、おのずと、その困難な、しかも立派な仕事のためにその精神を狭小なものにしてしまった。<sup>xlii)</sup>

しかし、このような芸術性の内在化を全ての仕事に当てはめることは、芸術性の定義がなされていない以上、非常に感覚的な話であり、強引さは否めないだろう。ただモリスが芸術性と述べている場合、単なる造形活動や作品以外にも多くのメタファーが含まれてることが多く、そこに論理的な思考力や倫理感を含めるのなら、大部分の仕事に芸術の内在化を当てはめて考えることが可能である。

## 2) 余暇と創造性の関係

モリスの思想の興味は、大部分がひたすら労働と芸術に向けられており、余暇について言及している箇所は少ない。その理由は、モリスにとって生活の余暇は、充実した仕事の後で必然的に獲得されるものだと考えていたからである。又、実際の所、当時の社会が労働者は社会にとって無用な生産物を作り続ける為に無用な労役を強いられ、生活を楽しむ余暇に欠けており、仮にその時間があつたとしても、それはその様な誤った社会状況を変革する為の闘争に費やさなければならないといった理由もあった。

故にモリスは、余暇における芸術について、現状では労働者にとっては知られていない楽しみで、有閑階級にとっては腐敗堕落した形態でしか存在しない楽しみだと述べている。<sup>xliii</sup>しかしモリスは、全ての人が仕事を行う理想社会では、物質的必需品の生産は各労働者の時間のわずかな部分にとどめられ、そこで生じた余暇は単なる休息やレクリエーション以外に、自らの技能の向上や研究、普遍的な知識の勉強、美の創造的活動に充てられるようになると考えていた。<sup>xliii</sup>この様に余暇の時間を創造的活動に充てるということは、多くの労働者が生きるために時間とお金と労力を費やしているような社会では考えられなかったことである。しかしモリスが、その様な社会状況の中で、この様な余暇に対する見識を持ち得たことは、モリスの先見性と正しさを証明している。

## 4 民衆と芸術

モリスが考える民衆とは労働者であり、その民衆にとっての労働は、有用な仕事である。そして有用な仕事は芸術性・創造性を持った仕事であり、創造性を持った仕事は民衆に喜びを与える楽しいものだと考えた。故にモリスは生活全体に芸術的な要素が広まれば、全ての民衆が喜んで仕事が出来た社会になると考えたのである。

またモリスは、すべての民衆が働くような社会では、「誠実と簡素」が徳として存在するようになり、過度な競争は無くなり、労働の均一化、適量化がはかられ、生活に余暇を生み出すようになると考えていた。そういう意味では理想的社会においては、民衆と芸術は分かちがたいものであり、生活の場となる空間には芸術性が溢れるのである。そして、この様に芸術と民衆が分

かちがたいものとするには、これを民衆に根付かせるためにも、芸術に対する教育は必要不可欠だと考えられる。例えば芸術の教育についてモリスの思想に大きな影響を与えたラスキンは、民衆に対する芸術教育の必要性を、以下のように述べている。

官立諸学校の芸術教育が、殆んど確定的に職業芸術家の指導養成に向けられ、従つてこれまで一般の世人、殊に上流階級の人達に依つて殆んど認められてゐないのは確かに恨事と云はなければならない。<sup>xlii</sup>

そしてラスキンは芸術家や職工人の教育は、一般に対する消費者教育を行い、優れた消費者を養成することが、社会に於ける専門家の技術向上には最良の方法だと述べている。

普通教育と云う一層當面的な目標に我々の注意を集中する事が、私には寧ろ望ましく思はれるからである。總じて藝術家と云ふものは、社会の需要するものならば、何物でも直ぐに生産し出すものである。職工も同様であつて彼らに對して、與へ得る最良の教育は、下手な仕事を退けて、上手な認めてやる事である。<sup>xlii</sup>

この様なラスキンの芸術教育への考察は、芸術を仕事とする者に対するの考えであり、民衆に対する芸術教育ではないだろう。しかし、ラスキンが述べているように、職工の仕事に対して下手と上手を見分けるためには、少なくとも民衆が芸術に親しみ芸術を理解する心が無くしては難しいということになる。そういう意味ではモリスの述べる理想社会の実現に対しては、まず、民衆に対する芸術の理解を深める身近な生活に芸術を取り入れていく環境と、その様な芸術に理解しうる教育が必要なのだと言える。

## おわりに

モリスの活動は本人の意志とは別の次元において、資本主義という体制の中で近代デザインを成立させ、そのデザインは流行という需要を作り出し、より資本主義を進展させる結果となった。そして現在、多くの社会主義国家が過去のものとなりつつあるが、現代の日本社会では、物質的な豊かさを背景に、ある一定の秩序の元、多くの人々が自己の能力・適正に応じて職業を選択し、適度な労働が行われている。またモリスが述べた労働の中における芸術性・創造性も、捉えにくい概念ではあるものの、その個人の感性に応じて仕事の中での職業意識として認識されている。そういう意味では社会主義か資本主義かという方法論は異なるものの、モリスの目指した民衆の中の芸術は、部分的に実現されたといつても良いのではなかろうか。

又、産業革命に比するような現代のパソコンに代表される情報機器、マルチメディアの発達によつてもたらされる社会変革は、「マルチメディア革命」<sup>xliii</sup>で述べているように、今後の社会の創造的可能性をより広げるかもしれない。

現代社会における「生活デザイン」とモリスの「小芸術」は

出自が全く異なるが、生活空間における芸術的活動という点において、同様の機能を有している。モリスが生きた時代と現代の社会背景は、大きな社会変革の中、人間の生活が豊かになった反面、人間疎外を生み出す要素が多分にある社会である。この様な社会の中で、生活中での活動で芸術性や創造性を身近に感じることは、人間疎外から自己の回復をはかる上でも重要な意義があり、それは現代も同様である。

## 註

- i) ウィリアム・モリス、(編) 梅根悟、(訳) 内藤史朗、「装飾芸術」、『モリス民衆のための芸術教育』、明治図書
- ii) William Morris, "The Decorative Arts: Their Relation to Modern Life And Progress", 1877, <http://www.burrows.com/dec.html>
- iii) ウィリアム・モリス、中橋一夫、「芸術の目的」、『民衆の芸術』、岩波書店、1953
- iv) William Morris, THE ART OF THE PEOPLE, Hopes and Fears for Art, The University of Adelaide Library Electronic Texts Collection, [http://etext.library.adelaide.edu.au/aut/morris\\_william.html](http://etext.library.adelaide.edu.au/aut/morris_william.html)
- v) William Morris, THE BEAUTY OF LIFE, Hopes and Fears for Art, The University of Adelaide Library Electronic Texts Collection
- vi) ウィリアム・モリス、(編) 梅根悟、(訳) 内藤史朗、「芸術と大地の美」、『モリス民衆のための芸術教育』、明治図書
- vii) William Morris, THE LESSER ARTS OF LIFE,
- viii) ジリアン・ネイラー、(監修) 多田稔、(訳) 金村京一、「デザインと社会主義」、『ウィリアム・モリス』、講談社、1990, p.172
- ix) 小野二郎、『ウィリアム・モリス研究』、晶文社、1986, p.134
- x) フィリップ・ヘンダーソン、川端康雄・志田均・永江敦、『ウィリアム・モリス伝』、(株)晶文社、1990, p.306
- xi) 小尾敏夫、[図説] デジタル・ネット産業革命、PHP 研究所、2000, p.16
- xii) 山根一眞、デジタル産業革命、(株)講談社、1998, p.5
- xiii) 小論では生活美術、生活造形、生活デザインといった、現代における人間生活における芸術活動を、便宜的に「生活デザイン」という用語で総括する。
- xiv) 染谷孝太郎、『産業革命序説』、白桃書房、1976, p.180, p.188-189, p.189
- xv) 琴野孝、『イギリス産業革命史研究』、1992、鳳書房、p.229
- xvi) T.S.アシュトン、(訳) 中川敬一郎、『産業革命』、岩波書店、1973, p.179
- xvii) ポール・マントゥ、徳増栄太郎・他、産業革命、東洋経済新報社、1965, p.586
- xviii) T.S.アシュトン、(訳) 中川敬一郎、『産業革命』、岩波書店、1973, pp.178-179
- xix) ウィリアム・モリス、(編) 梅根悟、(訳) 内藤史朗、「有用な仕事と無用な労役」、『モリス民衆のための芸術教育』、明治図書、p.97
- xx) ウィリアム・モリス、中橋一夫、「如何にして私は社会主義者になったか」、『民衆の芸術』、岩波書店、1953, p.103
- xxi) J.ラスキン、賀川豊彦、「ヴェニス石」、『世界大思想全集 第62巻』、春秋社、1931
- xxii) ウィリアム・モリス、(編) 梅根悟、(訳) 内藤史朗、「有用な仕事と無用な労役」、『モリス民衆のための芸術教育』、明治図書、p.92
- xxiii) 「産業革命の本質は、競争がそれまで富の生産と分配とを統制していた中世的諸取締りに代ったことである。この故に、産業革命は単にイギリスの歴史における最も重要な諸事実の一つであるのみでなく、ヨーロッパが二大思想体系——経済科学およびそのアンチテーゼとしての社会主義——の発達を負っているのもこれである。」、トインビー、原田三郎、イギリス産業革命史、創元社、1953, p.114
- xxiv) フィリップ・ヘンダーソン、川端康雄・志田均・永江敦、『ウィリアム・モリス伝』、(株)晶文社、1990, p.384
- xxv) トインビー、原田三郎、イギリス産業革命史、創元社、1953, p.116-p.117
- xxvi) ウィリアム・モリス、中橋一夫、「芸術と社会主義」、『民衆の芸術』、岩波書店、1953, p.69-p.70
- xxvii) ウィリアム・モリス、中橋一夫、「民衆の芸術」、『民衆の芸術』、岩波書店、1953, p.33
- xxviii) ウィリアム・モリス、中橋一夫、「芸術・財貨・富」、『民衆の芸術』、岩波書店、1953, p.136
- xxix) ウィリアム・モリス、中橋一夫、「芸術と社会主義」、『民衆の芸術』、岩波書店、1953, p.72
- xxx) ウィリアム・モリス、中橋一夫、「如何にして私は社会主義者になったか」、p.103
- xxxi) 藤田治彦、『ウィリアム・モリス [近代デザインの原点]』、鹿島出版会、1996, p.121
- xxxii) ウィリアム・モリス、松村達雄、『ユートピアだより』、岩波書店、1968, p.241
- xxxiii) 小野二郎、『ウィリアム・モリス研究』、晶文社、1986, p.135
- xxxiv) ポール・マントゥ、徳増栄太郎・他、産業革命、東洋経済新報社、1965, p.514-p.515
- xxxv) 『最後に都市では機械が採用され、金銭関係が決定的に確立され、かつ景気の大変動が始まるようになった。昔は雇主が彼の雇人を仕事の無い時も食わせていた。今では彼

はその責任を拒否した。この職人の地位の低下は、当時の著述家によって、「職人を支配している人々の不当な抑圧行為」のせいに期せられえた』、トインビー、原田三郎、イギリス産業革命史、創元社、1953、p.140-p.141

xxxvi) 岡田隆彦、『芸術の生活化』、小沢書店、1993、p.37

xxxvii) ウィリアム・モリス、中橋一夫、「芸術と社会主義」、『民衆の芸術』、岩波書店、1953、p.92

xxxviii) ウィリアム・モリス、生地竹郎、「余はいかにして社会主義者となりしか」、『ジョン・ボールの夢』、未来社、1973、p.175

xxxix) ウィリアムモリス、松村達雄、『ユートピアだより』、岩波書店、1968、p.137

xl) 「ゆえに芸術の目的は、人々に彼らの暇な時間をまぎらわし、休息にさえあきることのないようにするために美と興味ある事件とをあたえることによって、また仕事をする際には希望と肉体的な快楽とをあたえることによって、人々に幸福感を味わせることにある。要するに人々の労働を楽しく、休息を豊かにすることにある。したがって、真の芸術は人類にとって純粋な祝福なのである。」、ウィリアム・モリス、中橋一夫、「芸術の目的」、『民衆の芸術』、岩波書店、1953、p.44

xli) 「また、この芸術の創造と、その結果である作品にある快楽とは、絵画とか塑像とかいった芸術品の製作の中だけにあるのではなく、いろいろな形式の労働の一部をなしているものであり、また当然そうでなければならない、といったことも理解していただかなければならない。」、ウィリアム・モリス、中橋一夫、「民衆の芸術」、『民衆の芸術』、岩波書店、1953、p.44

xlii) ウィリアム・モリス、中橋一夫、「民衆の芸術」、『民衆の芸術』、岩波書店、1953、p.9

xliii) ウィリアム・モリス、編) 梅根悟、訳) 内藤史朗、「あるべき工場」、『モリス民衆のための芸術教育』、明治図書、p.124

xliv) ウィリアム・モリス、編) 梅根悟、訳) 内藤史朗、「あるべき工場」、『モリス民衆のための芸術教育』、明治図書、1973、p.123-p.124

xlv) ラスキンの、訳) 西本正美、『藝術経済論』、岩波書店、1927、p.185

xlvi) ラスキンの、訳) 西本正美、『藝術経済論』、岩波書店、1927、pp.189-190

xlvii) 「自らの想像力、思考を高め、常に新たな自己表現、自己実現をめざす。マルチメディア王国はそんな創造的な個人が集まる場所になるかもしれない、という思いを込めている。生活のために仕事をし、労働力再生産のために休むのではなく、自己実現のために仕事、遊びを楽しむ創

造的な個人の楽園、それがマルチメディア王国の真の姿かもしれない。」日経産業新聞、マルチメディア革命、日本経済新聞社、1993、p.279

(提出期日 平成17年11月28日)